新宿駅で空襲に遭う

●世田谷区南烏山六丁目
岩出　節子

忘れもしない昭和二〇年四月二五日の夜、祖母、母、弟、妹たちが疎開している山梨県（甲府の一駅さき）へ行くため、父と私と二人で新宿駅で夜行列車を待つ。すごい人で乗り切れず、最終列車を待つことになった。

その際、空襲警報が発令された。皆、駅構内から西口広場（現在のバスターミナル）へ行く。防空壕はたくさん並んでいたが、余り大きなものはなく、粗末なものであった。

とりあえず背負って来た荷物を下に置き、様子を見ることにした。次第に烈しくなる。前方の空にB29が旋回しながらこちらに向かって来る。他の一機は火だるまになって落ちて行く。

現在のテレビドラマと同じ光景である。上からジュラルミンが落ちてくる。よけながら小さな木の下に行く。あちらこちらに焼夷弾が落ち、チューリップの花が咲いたかのように燃えている。最初は土砂で火を消していたがとても間に合わない。

もうここにいては危険だというので、荷物を置いたまま駅の地下道を抜け、前回焼残ったお風呂やさんのタイルの陰に行く。途中火の粉が吹雪のようにとんで来る。お互いに背中の火の粉を消し合う。防火用水の水も少なく泥水のようだった。

それを頭巾にかけ夢中で逃げた。

三時間位の後、東の空が明るくなってきた。やっと解除の発令が出て皆ホッとした。一夜のことだが何十年経っても頭から離れない恐しい思い出となってしまった。そのため夢を見るといつも空襲の夢、B29が編隊を組んでこちらへ飛んでくる。

一番印象に残ったことを書いたが、二度とこのような恐しいことのないよう周囲の者に折りにふれ話をしております。

私の空襲体験

●和田二丁目
岩村　房子
（昭和七年生まれ）

私は、当時女学校へ入学したばかりでした。入学した当時は、それ程感じなかったように思います。空襲警報のサイレンが鳴りますと、家が近くなので、一目散に跳んで帰ります。でも、家族は母と弟四人は疎開して、家には私と父と兄でした。兄も空襲になりますと学徒動員で、三鷹の日本無線で働いておりましたので、電車が止まって走らないので、歩いて帰ってくる事もありました。

下町が三月に空襲にあい、父の姉が焼け出されて家に来ておりました。私にとっては伯母に当たります。伯母の家でも、伯母の夫である伯父の田舎の新潟に、おばあさんと従妹が疎開しておりました。もう一人の従兄は少年警察官でした。焼け出されてまもなく、寮に入りました。毎日毎日空襲が烈しくなって来ます。父は当時、交通局に勤めておりましたが空襲になりますと、職場に跳んで行かなくてはなりません。私たちは当時子供だったので、母一人に六人の子供を託して行けなかったのだと思います。前々から、退職願いを出していたそうです。母弟四人を疎開させて、安心したようでした。前から庭に、防空壕を掘ってありました。母の妹の簞笥（たんす）を入れるのだといって、今度は横穴を掘りました。電気も付くようにしました。掘り直したので、荷物は何一つ入っておりません。

五月二四日の夕方、防空壕が出来上がりました。入口の扉にはとたん板を張り、その上に土を被せるようにして、完璧に出来上がりました。その夜警戒警報が鳴り、続いて空襲警報が鳴りました。私は無我夢中で荷物を入れるのを手伝いました。後の事はもういいから、おまえたちはリヤカーで逃げなさいと言って、中には小さめな敷布団と座布団一枚を入れてくれました。もし、火の粉が飛んで来たら、リヤカーを横にして布団を被りなさいと言われました。頭には防空頭巾を被りもんぺ姿で逃げるのに、ぺちゃんこな下駄を履いておりました。その方が、逃げるのに走りやすいと思ったのでしょう。

突然ものすごい音がしました。私は初めて家の中を下駄を履いて走り廻りました。すぐ、伏せをしました。爆弾でも落ちたのではないかと思いました。すぐ裏の家に、不発弾が落ちたそうです。私の家の前の通りには人が、ごったがえしておりました。家の斜め前に広いグランドがあります。人々が

そこに、皆んな集まって来ます。私と兄と二人でリヤカーで逃げた所へ、伯母が帰って来ました。父は、おまえたち三人で早く逃げなさいと言って、リヤカーを門の外へ出してくれました。ただ、早くと言うだけでした。グランドには大勢の人たちが集まっておりました。上を見ますと、焼夷弾がすごい量で落ちて来ます。その度に皆んなは、きゃあとか、あっとか、言ってさわぎ、泣き声やら叫び声やら、それは生地獄です。もうだめだと思いました。でも、焼夷弾はみんな斜めに落ちて行きました。落ちたところはすごい火柱が上がりました。戦争中なので、グランドの隅にさつま芋の畠が作ってありました。そこに、怪我をした人が這うようにしておりました。私たちのリヤカーに荷物が入っていないので、是非乗せて下さいと言われて、その人を乗せました。途中、もう焼け落ちそうになっているのに、隣組の人たちが消火に当たっておりました。逃げる途中煙がひどくて、目が開いていられません。私と伯母は後押しなので、兄は大変だったと思います。何しろ、一メートル先が煙で見えない状態です。目からは、煙くて、涙が出て、どこを、どう歩き廻ったか、分かりません。

着いた所は神社の境内でした。高台なのでもう安心と思い体の力が、抜けてしまいました。リヤカーの怪我人の人は、ももに直撃を受けているのに、たばこを吸っていました。朝を待って、家路を急ぎました。帰り道の、遠く感じたことはありませんでした。途中、子供の焼け死体を見ました。グランドの隅に砂場があります。隣組の人々が、どこからとはなく集まって来ました。隣組では、天理教の先生が一人煙に巻かれて亡くなりました。皆んな、砂場の廻りに腰を下ろし、ただ沈黙だけでした。私の家ももちろん焼け、木炭とコークスがまだ赤く燃えておりました。父が逃げる際、台所の物が何一つ積んでいないのに気付き、鍋や釜その他の物、大工道具、スコップ、鍬等もう一つのリヤカーに積んで置き、消火に当たっていたそうですが、もうだめだとあきらめて、用意してあったリヤカーで逃げたそうですが、とても煙がひどく麦畑で一夜を明かし、私たちの所に来た時には片目が開けず、手ぬぐいにたんこぶを作って、はちまきをしておりました。

それから少したって父は、防空壕の上に、焼トタンで屋根を作りました。作り終わった所に、雨、涙雨がぱらぱらと降って来ました。父は、ゆっくりと土をのけて、防空壕を開けました。中には何事もなく、荷物は無事でした。毎日防空壕の中で、暮らしました。その内、父がどこからとはなく材木を運び、バラックが出来上がりました。そのころには母たちも、焼け後の方が心配ないのではないかと、帰っておりました。

また、父に召集令状が来ました。七月のことです。母は、どんな思いで、父を見送ったことでしょう。すぐ八月一五日、日本は戦争に負けたのです。でも最後まで、負けるとは思ってもいませんでした。裏の叔父さんは、日本は戦争に勝ったと言って、万才、万才と叫び涙を流しておりました。天皇陛下のお言葉を聞いて、初めて日本は戦争に負けたのだと思いました。父は内地にいたので、じきに帰って来ました。

遠い昔を偲んで

●天沼三丁目
薄井　八重子
（大正二年生まれ）

昭和二〇年当時の私は、明治神宮表参道近くの原宿に住んでいました。そして連日連夜の警戒警報、空襲警報に怯えながら町会事務所に勤め、転出転入等の仕事に追われていました。同年五月二五日夜、またしても不気味な空襲警報のサイレンにすぐ電灯を消し外へ出た途端、空はレーザー光線の走るごとく数知れぬB29の巨影が、そして爆音と焼夷弾が雨霰のように――常日ごろ訓練の時、群長さんに空襲の折は代々木練兵場に避難するよう叩き込まれていた私たちでしたが、目前にバラバラと爆弾の破片や火の粉が落ちて来ては、いかんともする事も出来ず、一瞬私は引き返すより術の無い事を悟り、次に言われていたのは青山墓地でしたので、急遽、向きを変え青山通りに走り出しました。そして、思いもよらぬ事にぶつかりました。参道入口近くは青山方面に逃げようとする人、青山渋谷通りの人はやはり練兵場の方へと人、人、人の山、さながら人の坩堝と化しており、逃げ惑う人の持つ小さな荷物には火の粉が降り、子供を背負った人の袢天の上からも火の粉は容赦なく降りかかる。火達磨になった人たちがばたばたと倒れて死んで行く様子はこの世の生地獄の様でした。ほんとうに暑い暑い、苦しい長い長い一夜でした。その後も参道の灯籠前には長い間お花が祀られていました。終戦後もずーと――。

私は裏道を這うようにして防火用水を頭巾の上から被り、びしょぬれになりながら赤坂の実家へ行きました。でも目の前に見たものは、茫然と立ち竦んで家屋の焼跡のくすぶりをうつろな目でじっと見ている姉の姿でした。「姉さんもう仕様がないよ。それより、夜になると困るから今のうちに千葉へ行こう」と焼跡の灰で熱くなった道を神田駅まで歩きました。途中、役所で罹災証明を貰い（切府が買えないので）、当時疎開していた両親と子供の所へ辿り着きました。そして三月あとの八月に終戦になったのです。連日うだるような暑さの中を、来る日も来る日も駅からの街道を、大きな荷物を担いだ復員兵がまるで行進しているように続いていました。

私も主人の事が一番気がかりでしたので、ジャワにいるというハガキを頼りに千葉の小仲台町に留守業務部があると聞

き、訪ねて行きましたら係の人が「南方とは今連絡がないのでもう一度来てほしい」と言われ、しばらくしてまた行きましたら、特設の建物は半分程になっていて机もまばらに置いてあり、係の人は「行方不明者の中に入っているのでちょっと、分かりかねる」と言われました。表へ出てから思い余って泣きくずれたのを今も想い出します。

そのころ、農家は、闇景気で何でも手に入るのですが、自分たちはそれを物に仕上げられず、私はせっせと内職に励みました。昭和二二年五月、片時も忘れる事のなかった主人が突然帰って来ました。そのころは家族がいなければ東京へは転入は出来ないので、主人は一時、新小岩の親類のところに籍を置いたのですが、運悪く水災にあう羽目になりました。でも私たちは、一日も早く家族一緒に住みたいと、焼け残っていると聞く中央沿線を探しに探した末、縁あって誰一人知人もいない杉並区に住むようになったのです。

この土地は農地を宅地にしたところ、建てる所だけ陸稲(おかぼ)を刈って焼け残っていた物を、全部金に替えて小さな家を建て、ガラスの配給は後として、枠だけの建具の中での生活でした。でも暑さ寒さも平気、楽しい楽しいやっと掴(つか)んだ幸せの日々でした。

主人は真面目一方の人で、昭和一六年八月、第一補充兵として召集され、役所関係にいたためかジャワ島で補助憲兵に抜擢され、そのため戦後シンガポールの刑務所に入れられ、同二二年五月復員してきたのです。その時すでに栄養失調からの結核でした。

役所は休職のまま毎日寝たきりの生活、私も又勤めながら看護の日々。少しでも余裕があると、先ず闇市でバターとか卵とか……買って来ては主人に「俺が死んだらすぐ困るのに」と言われ「その時はその時、病人は心配しないで」と取り合いませんでしたけど、昭和二四年一〇月亡くなりました。後には幼い子と私が残されました。「何らかの補償があってもいいんじゃないか」と思い、区の方へ相談に行きましたら、「体が悪くて二年近く寝ていたのなら、戦地での病院での証明でもあるはずだ。それが無ければ駄目」と断られてしまいました。復員する時「身体が弱いの、悪いのといったら乗船はおろか復員も出来なかった」と常々話していました。でも二年近くこの手で、このファイトで、頑張ることができたとただ感謝しています。

たとえ靖国神社に祀られなくても、何一つとして褒賞されなくても、この目で、この手で、最後を確かめられた事を最高だったと決して悔いていません。

東京大空襲　証の二品

●荻窪三丁目
倉持　れい子
（昭和一八年生まれ）

ここに昭和二〇年東京大空襲の証しとなる二つの品がある。その当時、私はまだ幼く自分自身の記憶は何もないが、母から語り継がれ、そして手渡された貴重な物である。

その一つは中野警察署長発行の「罹災証明書」である。B4判の半分のサイズで、表裏に印刷された文字のほか手書きで衣料切符、塩交付などが記されている。罹災証明書の内容は、住所が中野区仲町、世帯主に母の氏名、家族数は二名、発行は昭和二〇年六月とある。

昭和一九年一一月から始まった東京への爆撃は、年末になると都内ほとんど全域がB29による波状攻撃をうけた。同二〇年は元旦から空襲が始まり戦火は一段と激しくなる。連日の警戒警報、空襲警報に夜もおちおち眠れない状態であった。

東京の約四割を焼失し、一〇〇万人の被災者を出した無差別爆撃が、三月一〇日の東京大空襲である。父は戦地に赴き、東京に残った母と私は当然この大空襲にも巻き込まれた。たびたびの空襲ですでにかなりの家財を失っていたが、この日の空襲で、母と私は命以外のすべてを失ってしまった。わずかな手回り品はもちろん、その前後の記憶さえも残されなかった。なにも覚えていないその中で一つだけ確かなことがある。焼け出されたその夜、もちろん寝る家などあるわけがない。焼け跡から板切れを拾ってきてそこに私を寝かせ、母はその回りを一晩中ぐるぐる歩き回っていたのだ。その後どのようにして中野区仲町に辿り着いたのか、不思議なほど思い出すことができなかった。

仲町にはA男爵の屋敷があった。母の叔父がA男爵の執事をしていた関係で、母は疎開までの一時を幸いにもここにいられることになったのだ。男爵の家族はすでに九州の国元へ帰り、男爵と数人の執事たちで屋敷を守っていた。屋敷内には数か所の防空壕があり、多少の食料などが入っている。母もその中に貴重な缶入りの飴を入れておいた。

東京空襲はその後も無差別爆撃、精密爆撃と止むこと無く続く。警報のたびに防空壕に飛込む不自由な生活を誰もが強

いられていた。

五月になるとB29は九州、名古屋方面を爆撃していた。東京への爆撃は二四日に再開され、二五日には山の手大空襲となる。

焼夷弾は仲町の屋敷にも襲ってきた。母は、私に防空頭巾を被せねんねこで背負った。母の被る防空頭巾は、背負っている私の頭をさらに覆うように被せられた。三枚のもんぺを重ねてはき、燃えさかる屋敷から逃げ出した母は、咄嗟に飴のことを思い出した。危険を承知で防空壕に飛込んだのだ。このころ、防空壕の中の品を守るために執事たちは片端から壕に土を掛け始めていた。母もすでに逃げ出したものと思い込まれ、母と私の入っている防空壕にも土がかけられてしまったのだ。母は必死でわめき続けやっとの思いで外に出る事ができた。その手に飴の缶はしっかり握られていた。

追ってくる火の中を逃げ惑う人波は、桃園国民学校を目指している。人々の持ち物には火の粉が落ちそれが燃え上がる。防火用水に水は一滴も無く、水を被ることもできない。顔は炎で煽(あお)られ、足元からは火が這い上がる。母は燃えるもんぺをもぎ取りながら逃げ回った。

学校方面と警察方面の別れ道だ。母は一旦は大勢の行く学校の道に紛れ込んだが、途中で引き返し警察への道を選んだ。とにもかくにも警察に辿り着いた。コンクリート造りのその建物は焼け落ちずに残り、多くの人の救いの場となったのだ。しかし、せっかくここまで逃げ込んでも、火の付いた衣服をもぎ取りながら泣き叫び、悶え苦しみそして死んでいく人は後をたたなかった。

そんな様を見た母は、もう生きてはいないかもしれないと思いながら床に私を下ろした。私は窮屈なおぶい紐から解き放されて床にしゃがみ込み、それから立ち上がると辺りをふらふら歩き回った。まずは助かったのだ。母の顔は火膨れとなり、髪の毛は焼け縮れ頭巾も燃えていた。二重に頭巾を被っていた私は火傷ひとつ負わずに、頭巾が焦げただけですんだのだ。あの時、命懸けで持ち出したあの飴は幾日かの命を潤してくれた。

二つ目の証しの品は、この焦げた小さな防空頭巾である。それは、紺色の木綿地で白や赤、黒などの様々な短い糸で縫われている。こんな小さな物を縫う糸すら不足していて、やっと糸を寄せ集めて作られたものだ。戦火から私を守ってくれたこの頭巾を、二度とこのような物が使われない事を祈って、母は結婚する私に持たせてくれた。

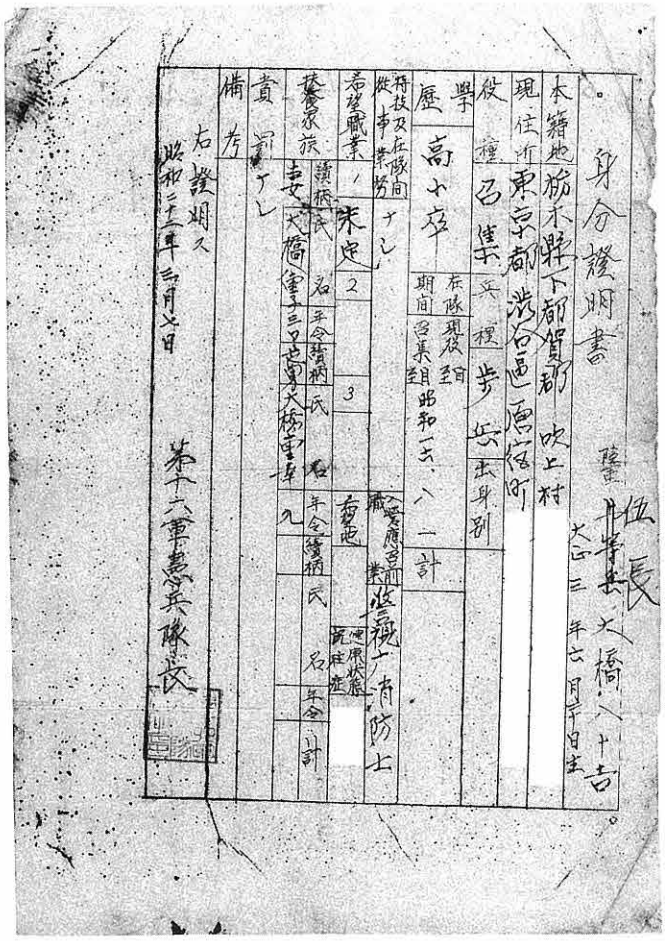
あれから四〇余年。私は「罹災証明書」を持って中野警察署を訪ねてみました。建物は昭和五六年に建て替えられ、もちろん当時の面影はありません。戦後、一番旧くから勤めている方が昔の資料を出してきて学校や仲町のことを調べてくださいました。

中野区役所戸籍課にも行きました。A男爵の戸籍はもう中

野区には無く、どこにあるかも分からないそうです。

仲町の屋敷跡を歩いてみました。辺りは小さな家が立ち並び、屋敷跡と思われる所は共同住宅になっていました。折よくA男爵邸の隣家に戦前からすんでいるS老人に話を伺うことができました。屋敷は大きな塀に囲まれ、近所との付き合いはほとんど無かったこと。焼け跡の庭に芋の植え方を男爵にS老人が教えたこと。その後一家は鹿児島に戻ったこと。しばらくして、長男が国会議員に立候補したことなどを話してくださいました。

一枚の古い証明書の数行から、幾つかを辿ることができました。


身分證明書

本籍地　栃木縣下都賀郡吹上村
現住所　東京都渋谷區[redacted]
役種　召集　兵種　歩兵　出身別
學歷　高小卒　在隊現役　期間　召集　自昭和一五、八、一　計
特技及在隊間従事業務　ナシ
希望職業　未定
家族　續柄　氏名　年令　續柄　氏名　年令
妻　大橋金三郎　大橋重子　九
養家族
賞罰　ナシ
備考
右證明ス
昭和二二年三月七日
第十六軍憲兵隊長

身分証明書〈提供　薄井八重子さん〉

私の空襲体験

●天沼三丁目
河野　アサ子
（大正一四年生まれ）

昭和二〇年三月九日は朝から良い天気でしたが、夕方ごろから風が出てきました。

当時、私は本所区横川橋五ノ一藤倉航空工業株式会社陸軍落下傘工場で働いていました。会社の近くのタバコ屋さんの二階の六帖間にTさんと二人で下宿をしていました。部屋代は二〇円で一人一〇円ずつ出し合いました。そのころの給料は二〇円位で、収入の半分は部屋代でしたから、生活は苦しかったように思います。

明日は陸軍記念日だなあー、神風でも吹いて大きな戦果をあげてほしいなあと思いながら、夕方早めに銭湯に行きフトンに入りました。突然空襲警報のサイレンがウーーーーと鳴り、時計を見たら午後一一時半ごろでした。

私は隣に寝ているTさんを起こして、いつもと違う予感がして二階の物干台に上って空を見ると、はるか西の方向、東京湾だろうか、B29の爆音とともに焼夷弾の火の雨が降っている。だんだん近くにもB29の音がする。四方から火の手が上がってきた。「Tさん危い!!　逃げよう!!」と衣類を防空壕に入れて外に出た。日ごろ避難場所は錦糸公園と聞いていましたのですが、その方向から荷物を持った人たちがどんどん逃げてくるので流れに逆らえず、押上駅の方に向かって流れに混って逃げました。その時は下宿屋のおじさんも家族もTさんも皆チリヂリバラバラになり私一人でした。やっと都電の通りまでたどりつきましたがすごい強風が吹き荒れて、家という家は火を吹いて燃え盛り、トタン板は飛んでくる。火の粉の中を向こう側に渡れない。道路の真中に都電が一台止まっていたので、人々はそれを目がけて我れ先にと乗った。入口近くに警官も一人いた。車中の人々は神も仏もあるものか、何が神風だと怒る人、何か口ぐちに唱える人、やく三〇分位電車の中にいただろうか、まわりの家はメラメラと火をふき、屋根が焼け落ちて、たちまち柱だけになっていく。フッと気がつくと、私の足元から火が吹き出している。都電の床に火がついたのだ。危い!!　逃げようと思ったら入口にいた警官がいない。私は都電から出てよろよろと向こう側の十間川の堤防までたどりつき、疲労と眠さで倒れてしまった。

ヒンヤリとした土の感触にああいい気持ちだなあーとしばらくは土に顔をあてて倒れてしまった。母の顔、弟の顔を思い浮かべながらややしばらく土の上で寝ていたようだ。誰かが来て「しっかりしろ!!」と声をかけてくれた。警防団の人だろうか、「大丈夫です」と返事をした。まわりを見ると火勢はおとろえて焼けた柱が黒く立っているだけです。逃げまどった人たちはどこへ行ったのだろうか。私はよろよろと立ち上がり歩き出した。その時の私の姿は防空頭巾にオーバコート、靴は自分の靴の上に兄がおいていった大きな運動靴、水に濡らした毛布を頭から被りズックのショルダーバック一つで荷物は何も持たなかった。今考えると物を持たなかったことが良かった。荷物に火がついたら大変だったと思いました。

さてこれからどうしようかー。まず会社へ行ってみよう!!毛布は重いから捨てた。昨夜乗っていた都電のまわりに黒こげの死体が何人かあった。逃げきれなかったのだ。可愛想に。そして下宿していたタバコ屋さんの家もきれいに焼け、廻りの家もきれいに焼けていた。それから会社に向かった。途中同潤会アパートは鉄筋コンクリート建てだから残っていた。会社は事務所も寮も作業所も焼けてしまったが、倉庫は残っていた。会社の人たち何人かが焼け跡の整理をしていた。そして女の人はお花茶屋の寮へ行くように、男の人は堀切の寮へ行くように指示されて、私はまた押上駅に向かって歩き始めた。朝日が射してきてまわりが良く見えてきた。午前六時位だろうかー。駅へ行く途中防火用水に首を突込んだまま死んでいる人、デパートのマネキン人形かと思ったら、女の人の死体、風で衣服がはぎとられイカの丸焼きみたいな赤紫の色、吐き気をもよおした。

押上駅まで来たが、電車は動いていない。線路づたいに歩いてお花茶屋の寮へついた。この辺は焼けなかった。私は煙で目をやられていたので、フトンを敷いてもらい横になり、目を冷やしてもらった。寮生たちはかいがいしく立ち働いていた。冷やして頂いたお陰で二、三日で目は治りました。会社は福井県に疎開することになりましたが、私は退社しました。

会社の人の話によるとTさんの、防空頭巾が会社の横を流れている十間川に浮んでいたそうです。あの火の中を熱くて川の中に入ったのでしょうか。色白で笑うと目が細くなり和服が良く似合うTさん!!　三月一〇日は貴女の命日ですね。あのるいるいとした死体は警察の人たちがトラックで運んだそうです。